

矢作川におけるアユ採捕量と体サイズの推定

内水面漁業研究所 内水面養殖グループ

矢作川では、毎年3月頃から海で成育した天然アユ稚魚の遡上が始まります。河口から約12km上流に位置する堰（藤井床固め）では、矢作川水系の4つの漁業協同組合が特別採捕許可を受け、遡上してきたアユを採捕し、ダムや堰の上流域へ放流する「汲み上げ放流」に取り組んでいます。

当グループでは、採捕した天然遡上アユをより効果的に漁場へ放流し、資源を有効に利用するため、藤井床固めにおける3月の天然遡上アユの採捕量および体重のデータと、過去の調査結果を用い、その年の総採捕量および体重推移の推定を行っています。

その結果、令和8年の総採捕量は、昨年と同程度の347kgと推定されました（図1）。また、採捕サイズは過去17年間の平均と比べて小さく、4月では1尾あたり3.7~1.9g、5月では1.9g以下になると推定されました（図2）。

4月以降に採捕されるアユが、友釣りの対象となる40g（全長16~17cm）まで成長する時期は、7月上旬から中旬にかけてと考えられます。このため、汲み上げ放流アユと大型の人工産アユを同一漁場に併せて放流することで、漁期初期には大型の人工産アユが主体となって釣獲され、その後、成長した汲み上げ放流アユが釣獲対象となるため、漁期を通じて安定した釣果が期待できます。

また、小型の汲み上げ放流アユは、解禁時期が遅い漁場や環境条件が良好で高成長が見込まれる漁場へ放流することで、資源をより有効に活用できると考えられます。

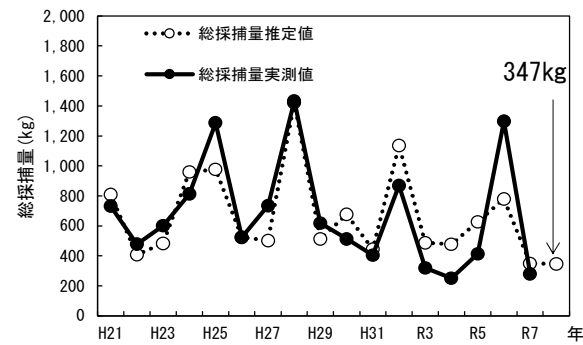


図1 天然遡上アユの総採捕量と推定値

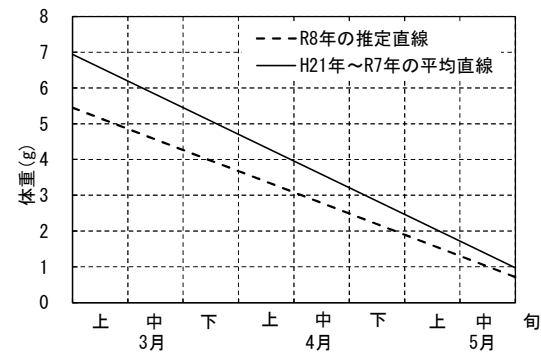


図2 R8年天然遡上アユの大きさの推定

トリガイ漁が今年も始まりました

漁業生産研究所 栽培漁業グループ

三河湾の春の味覚であるトリガイ漁が3月30日から始まりました。4月2日の吉良市場には、水揚げされたトリガイが並び（図3）、市場は活気のある様子でした。この日のトリガイの大きさや漁獲量はともに例年並みでした。

当グループでは、毎年、三河湾内においてトリガイの浮遊幼生量を調べています。令和7年は主に5月から7月に浮遊幼生が確認されました（図4）。

トリガイは成長が早く、卵からふ化した浮遊幼生は1年後には漁獲サイズ（殻長7cm）まで成長し、前年の浮遊幼生量が翌年のトリガイ漁獲量に影響します。それに加え、貧酸素水塊の解消時期や規模等の環境要因が資源形成に大きく影響することが、これまでの研究成果により示唆されています。令和7年度浮遊幼生量は豊漁であった平成30年に次ぐ量でしたが（図5）、4月の市場調査から令和8年の漁獲量は例年並みと予想されます。

当グループでは今後も調査を継続し、トリガイ資源の発生機構解明に取り組んでいきます。



図3 4月2日の吉良市場で水揚げされたトリガイ

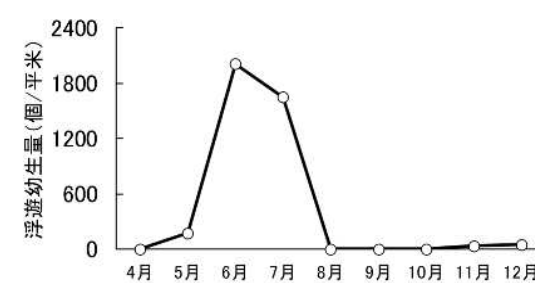


図4 R7年度トリガイの浮遊幼生密度

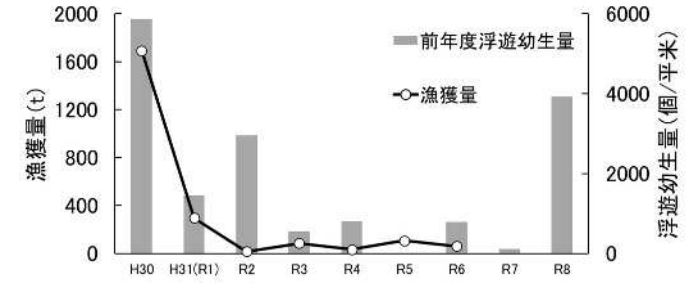


図5 トリガイ漁獲量と前年度浮遊幼生量（4~12月計）の推移

愛知の水産研究活動報告会開催のご案内（参加自由）

本場 企画普及グループ

漁業協同組合の研究会や青年部が日頃の研究活動を発表し、情報交換や活動成果の普及を図る報告会が開催されます。また、報告会では三谷水産高校による体験発表も行われます。

- 日時及び場所 令和8年6月20日（土）午後2時～、愛知県水産会館5階大会議室
- 報告内容
 - ①「愛知県 篠島うみいく～海育・海良く・海育～プロジェクト」取組報告（篠島漁協青年部・（株）大林組）
 - ②西三河地区におけるメスウナギ生産技術の現場への導入について（一色うなぎ研究会）
 - ③安定した青のり養殖を目指して 東三のり研究会の取り組み（東三のり研究会）
 - ④東三河の観光客増加計画～地域活性化への歩み～（三谷水産高校水産食品科）

